

I. 実施概要

(ア)調査の目的

本調査は、内部質保証ならびに自己点検・評価の一環として、神戸女子短期大学(以下、本学とする)の現状・特徴を把握し、マーケティングやエンロールメント・マネジメントに活用することを目的とする。

(イ)調査対象

2022年10月1日現在、本学全学科(総合生活・食物栄養・幼児教育)に在籍する全学生306名を対象とした。

1年次生 144名

2年次生 162名

(ウ)調査方法

一般財団法人短期大学基準協会が実施している『短期大学生調査(Tandaiseichosa)』を用いた。本学においては、平成29年度から継続して同調査を行っている。

方式：マークシート式

時期：令和4年10月～11月中旬

回収率：回答者数296名/在籍者数306名 97.3%

II. 結果・考察

【結果】

- A0入試による入学者割合(43%)昨年度とほぼ同様(昨年度本学(49%)、今年度全国(31%))
- 入学動機は昨年度とほぼ同様の傾向
 - 重視している項目(重視した+やや重視した)
 - ① 自分の興味があることや専門分野の内容が学べる(93%)
 - ② 就職するのに必要な資格が取れる(79%)
 - ③ キャンパスの雰囲気がよさそうだった(75%)
 - あまり重視していない項目(重視した+やや重視した)
 - ① 奨学金や学費免除などの経済的サポートがもらえる(33%)
 - ② 専門学校に行きたくなかった(37%)
 - ③ 4年制大学に編入することができる(41%)
- 授業内容の傾向

全国平均に比べて「キャリアに関する教育」「定期的な小テスト」「図書館を利用する」の項目が高かった。その一方で、全国平均より低い結果となった項目は、「提出期限までに宿題を完成できない」「文献や資料を集める」「授業をつまらなく感じた」等であった。
- 学習時間：全国平均と比して、授業に関する勉強に費やす時間は多いが、授業に関係ない学習に

費やす時間は少ない傾向

- 教員と関わる機会：全国平均と比して、進路相談は多いが、学習や研究に関して関わる機会が少ない傾向
- 活動や体験：今年度も新型コロナウイルス感染症の影響で、全体的に活動割合が低くなっているが、少しずつ活動が再開しており、サークルや部活・その他の学生団体への参加度は昨年度6%から12%へ、地域貢献・ボランティア活動への参加度は昨年度7%から14%と倍増している。
- 施設・サービス：全国平均と比して、ほぼ同等以上の満足度であるが、奨学金に対する満足度は低い。
- 教育：全国平均と比して、授業に関する満足度は高いが、サークルや部活に関する満足度が低い。
- 能力や知識：概ね向上・増加したと実感しているが、リーダーシップや外国語を使う力、データなどの理解力、読解力、社会問題への理解力、自学自習の能力に関しては過半数が向上していないと感じている
- 意識や関心：計画性・スケジュール管理、キャリア意識、自己理解などは向上しているが、地域や社会貢献への意識、選挙への関心は変化していないと感じている者が多い。
- 進路希望：総合生活学科は「ビジネス・経営系」「アパレル・ファッション系」「美容系」「旅行・ホテル・ブライダル系」「建築・インテリア系」「医療・看護系」など多岐にわたり、食物栄養学科は「食・栄養系」68.5%、幼児教育学科は「保育・こども系」(85.2%)と各学科の特徴が表れている
- 総合評価：充実度(70%)、他の学生(69%)・教員(73%)・事務職員(59%)との関係、キャンパスの居心地(68%)、まなび(学習)(73%)については、総じて満足度が高い

【考察】

令和4年度の結果としては、全体的に昨年度とほぼ同等の結果となっているが、新型コロナウイルス感染症から少しずつ日常生活が回復してきており、授業は非常勤講師も含めほぼ年間をとおして対面で実施され、小規模なスポーツ大会などの課外活動も実施することができ、活動や体験の項目においては、昨年度よりも参加率が増加した。

全国平均に比べて「パソコンなど情報機器を使う」「宿題や課題」「定期的な小テスト」等の項目が高いことから、学修支援システムとしてのmanaba、KISSシステムやZoom等を併用しながら、教育活動において効果的にICT技術を活用していること、また、ICT技術を活用できる学習環境が本学には整っていると捉えることができる。

さらに、全国平均より低い結果となった項目に、「提出期限までに宿題を完成できない」「授業をつまらなく感じた」があがっているが、これは、授業の改善及び工夫といった日頃の教員側の努力が影響していると考えられる。